

「投下する」側の「記憶」

——二〇一五年・日本からの再検証

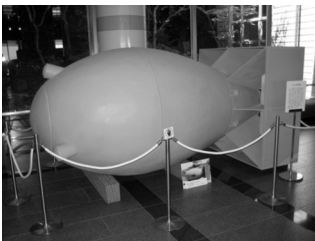
島村輝

I 新井卓「49 pumpkins」のアプローチ

さまざまな意味で「戦後」七〇周年の節目ということを考えざれられることとなった二〇一五年の初頭、一月二四日午後、六本木の「スペース ヒリオン」という小さな会場で、新進の写真家・新井卓の制作した「49 Pumpkins」という映画の上映会が催された。新井はダグレオタイプの技法を伝える優れた写真師であるとともに、広島、長崎と福島を繋いで考えようとする、意欲的な表現者でもある。「49 Pumpkins」は、戦争中に原爆の予行演習として投下された四九個の模擬爆弾の呼び名「パンプキン（カボチャ）爆弾」をタイトルとした、短編映像作品である。

「パンプキン爆弾」は、第二次世界大戦中にアメリカ軍が開発、使用した特殊な目的を持った爆弾である。もちろん爆弾として使

用された以上、爆薬を搭載し、破壊力を持った兵器であったが、むしろその特徴は、一九四五年八月九日に長崎に投下された原子爆弾（原爆）「ファットマン」とほぼ同一の形状を有し、重量もファットマンとほぼ同一になるよう調整されたものだったということである。すなわちこの爆弾は、原爆投下に備えた爆撃機乗員訓練のためと、今までに例のない特殊な形状をしたファットマンが爆撃機（原爆搭載可能なように特別に改修したB-29）から投下され爆発するまでの弾道特性・慣性エネルギー等の様々な事前データ採取のため、第二次世界大戦末期の対日戦争における原爆投下の予行演習のために開発され、使用されたものであった。正式名称



パンプキン爆弾

訓練のためと、今までに例のない特殊な形状をしたファットマンが爆撃機（原爆搭載可能なように特別に改修したB-29）から投下され爆発するまでの弾道特性・慣性エネルギー等の様々な事前データ採取のため、第二次世界大戦末期の対日戦争における原爆投下の予行演習のために開発され、使用されたものであった。正式名称

は「一万ポンド軽筒爆弾」である。「Pumpkin Bomb」とは、マンハッタン計画に携わる、ロスアラモス研究所の科学者と兵士によって命名されたものだが、軍用スラングの常として、「bomb」を省き、単に「パンプキン」と呼称される場合も多い。

投下の目標とされたのは原爆投下候補地だった京都市、広島市、新潟市、小倉市の各都市を四つのエリアに分けた周辺都市（広島市ならば宇部市、新居浜市など、新潟市ならば富山市、長岡市など）にあつた軍需・民間の大規模工場・鉄道操車場等であつた。原爆投下候補都市は、原爆による威力を正確に観測するために、事前の空襲は禁止されていたために周辺都市が目標となつた。一九四五年七月二〇日、新潟エリアである富山市・長岡市・福島市・東京都（実例の一部として、現在の練馬区大泉学園地区、西東京市の西武柳沢駅近辺）へ計一〇発投下されたのを皮切りに三〇都市に五〇発（うち一発は任務放棄し爆弾は海上投棄された）投下され、全体で死者四〇〇名・負傷者一二〇〇名を超す被害が出た記録が残っている。海上投棄された一発を除いた四九発の投下記録から、新井の映像作品は「49 pumpkins」と命名されている。

投下は爆撃手の目視によると厳命されており、天候などの制約があるため、必ずしもその場所に投下された訳ではない。アメリカ軍の資料によれば、前述の目標に投下できない場合には臨機目標としての都市でもいいので町の真ん中に落とすようにという指示があつたとされる。その為、七月二六日の訓練では天候悪化により富山の軍需工場への爆撃に失敗しその帰りに島田市（島田空襲、焼津市、静岡市、名古屋市、大阪市など軍需工場とまったく関係ないところ）にまで投下されたというような例もある。

搭載機は原爆投下任務時同様にパンプキンを目視にて投下後、速やかに一五五度の急旋回・急加速にて回避行動をとることとされた。これは原爆投下後、搭載機を含めた攻撃部隊が爆発に巻き込まれることを避けるためである。もつとも、原爆投下任務全てにおいて爆撃機乗員の生命の安全は何ら保障されていなかったようである。

戦後、米戦略爆撃調査団はパンプキンに対して「当該爆弾が目標に直撃及び至近弾となつた場合、目標に相当量の構造的被害を与える非常に合理的かつ効果的な兵器であつた」との評価を下した報告書をまとめている。原爆投下より前の模擬投下は「フェーズI」として行われ、その後「フェーズII」として八月一日日に春日井市に四発、挙母町（現豊田市）に三発投下されている。これは戦後にこの爆弾を使用して効果が得られるかどうかのテストとして行われたもので、有効な兵器とされたが生産コストに見合わないとして不採用とされた。そのため、テニアン島に残っていた六六発のパンプキン爆弾はその場で海に沈められ破棄された。爆弾の破棄には機密保持の意味もあつたとされる。



49 Pumpkins

新井の作品「49 pumpkins」は、アメリカ合衆国に現存する、飛行可能なB-25爆撃機を実際に飛ばし、そこから四九個のカボチャを投下する様子を、機内と地上から撮影した

映像を中心に作られたものである。新井は実際にアメリカに渡り、飛行機と飛行場、爆弾に見立てられたカポチャを投下する広い農園、さらに出演や撮影に協力してくれるスタッフを集め、自ら古ぼけたB-25爆撃機に乗り込んで、そこからのカポチャの投下を撮影した。

カポチャが落下してくる地上にもいくつものカメラが置かれ、実際の原子爆弾に「リトルボーイ」「ファットマン」という呼び名がつけられていたように、一つ一つ呼び名がつけられた四九個のカポチャが、地上に落下して粉々に崩壊する様子を、つぶさに撮影している。作品の上映時間は一五分程度の短篇であるが、バツクに使われる効果音や音楽、映像の処理などたいへん凝った作りとなつていゝものである。この作品を観終つた観衆は、それまでの原爆を扱つたどういつた映像とも異なつた、一種の不思議な体験を持つたという印象を得たといえる。

制作・監督者である新井は、

アメリカで、現地の人たちと戦争の話をしていると、原爆の投下の話題になるときに、どうしても嘔みあわないうところを感じた。それはつまるところ、戦争状況の直接的当事者である兵士が、作戦の一つとして「投下」する、という際の心理と、戦中とはいいいながら、基本的には通常の市民生活を営んでいた市民が、突然の出来事として「被爆」する、という、それぞれの側の環境や事情が生み出した「視点」に相違、「感覚」の懸隔としてあるのではないかと思つた。

それならば、もちろん戦争中ではないし、実際に原子爆弾を投下する予行演習として模擬爆弾を投下するわけではない

が、みずから「投下」する側の視点に立つて、爆弾にみたてたカポチャを投下するという行為は、自分にとつてどのような感覚を喚起するか、またそれを映像作品として記録・編集していつた場合、どういう効果や印象を与えるものになるのか、という点を追求してみたいという気になつた²⁾。

と、筆者に語つてゐる。

一九七八年生まれの新井にとつて、もちろん「アジア太平洋五年戦争」も、原爆投下も、直接の体験は持ちえない出来事である。一方、二〇一一年の東日本大震災とその後引き続いた東京電力福島第一原子力発電所の事故は、核兵器の開発と原子力発電との深い関係、その歴史的密着のからくりについて、多くの人が関心を持つ契機ともなつた。原発事故後の福島に入つて、ダゲレオタイプその他の手法により、さまざまな角度から放射能事故の表現に携わつてきた新井にとつて、「49 pumpkins」の制作は、原発の存在やそこからの必然ともいえる事故と、「アジア太平洋十五年戦争」末期の原爆の開発、投下とを歴史的につなぐ、表現者としての感覚を探るために、必然ともいえる試みだったといえるであろう³⁾。

II クロード・イーザリー／ギンター・アンデレス『ヒロシマ わが罪と罰』

この作品のエンド・ロールには、スタッフらの名が記されているが、その最後にクロード・イーザリーの名が挙げられ、彼への献辞が付けられていた。現在でも「広島・長崎への原爆投下は、



クロード・イーザリー

さらなる戦争の長期化を食い止め、多くの人命が失われることを防ぐために有益だった」とする考え方が、アメリカ国民の中に広くいきわたっている状況⁽⁴⁾の中で、イーザリーは、広島・長崎への原爆投下に直接携わったアメリカ軍人のなかで、きわめ

て例外的にその犯罪性、あるいは原罪性を認めてきた人物である。クロード・ロバート・イーザリーは、一九一九年、アメリカのテキサスで生まれた。大学を卒業後空軍に入り、太平洋戦争開戦とともに第五〇九飛行連隊に所属、マリアナ諸島のテニアン基地に駐屯していた。一九四五年八月六日未明、テニアン島北平地を飛び立った「特別ミッション13」のB-29戦闘爆撃機は、直接に広島に原子爆弾を投下したエノラ・ゲイ (Enola Gay) を含め七機だった。この時広島気象偵察の任務を負ったのが、ストレート・フラッシュ (Straight Flush) であり、その機長兼操縦士がクロード・ロバート・イーザリー少佐だった。広島の上空に達した後、エノラ・ゲイ号の爆撃手に対して原爆投下の命令を下したのも、イーザリーだった。

除隊後の彼は広島への原爆投下に激しい罪の念をもったとされ、その暴露と弾劾のためとして、犯罪に手を染めることさえした。酒乱、自殺未遂、さらには金を奪う目的がないのに郵便局をギャングしたりした挙句、ついに精神錯乱者として、復員援護局が管理する、ウェイコーの退役軍人専用の病院に強制収容されていた。広島原爆投下の任務を負った「特別ミッション13」七機、



ギュンター・アンデレス

要員合計七一名の中で、「原爆投下」に激しい罪の念をもったと伝えられるのは、このイーザリー一人である。

このイーザリーと文通を交わし、彼の原爆投下への反省的思考を広く世界にアッピールしたのが、ギ

ュンター・アンデレスである。アンデレスは一九〇二年、ユダヤ系ドイツ人で、著名な心理学者であったワイリアム・シュテルンを父として生まれた。哲学、心理学、芸術史などを学んで文筆の道に入るが、何事にもこの著名な父を引き合いに出されるため、「アンデレス(別人、他人)」というペンネームを選んだという。アンデレスの記すところによれば、当時『ニューズ・ウィーク』誌に掲載された、ほんの数行の、イーザリーのことを伝える記事を目にしたことから、二人の文通は開始されたということになっている。これはイーザリーが病院に収容されたあとのことであり、文通の期間も二年間ほどと比較的短かったのではあるが、二人はさまざまな困難を克服しながら、イーザリーが原爆を投下するまでの事実と内面的真実を赤裸々に告白するまでに、その関係を深めていったのであり、そこに関するアンデレスの多方面にわたる働きかけや努力の大きさを、否定することはできない。

ちくま文庫版『ヒロシマ我が罪と罰』に収録された、「イーザリーから日本のN師へ」とされる(手紙の四二)で、イーザリーは原爆投下の時の事情を、次のように語っている。

私は広島の上空に達してから約四五分間、そのあたりを

飛行しながら、広島の上空に立ちこめて一部視界をさえぎっていた雲の状態を知らされました。原爆投下の目標は、軍司令部と広島市との中間にある橋でした。(中略)

この日、すなわち八月六日の天候の状態はつぎのようでした。(略) 目標の地点ははっきりと見えていました。それは、すでに申しあげましたとおり、一つの橋で、この橋を破壊することによって、日本軍の司令部に致命的な打撃をあたえずにはいられないだろうと考えられたのです。

私には、天候の状況は理想的であると思われました。つまり、目標の橋だけが見えていて、広島市は視界からさえざられているから、市それ自体は爆撃をまぬかれるだろう、そして、司令部に投下された原爆は、日本の軍部をして否応なしにその恐るべき破壊力を知らしめ、講和の条約に署名してこのおそろしい戦争を終わらせねばならぬと悟らせるだろう、とこのように私には思われたのです。

私は、僚機に対して、「準備完了、投下」を知らせる暗号の命令を送りました。すなわち私は、目標への原爆投下を指令したのです。

しかし私の希望は実現しませんでした。広島上空の雲が散ってしまったために、爆撃手は三千フィートほど目標をはずれ、広島市を爆撃してしまったのです。

こうして自分の果たした役割について詳述したイーザリーは、続けてまた以下のようにも付け加えている。

たとえそれが、どんなにつらいことであろうと、生きるということとは、世界中で最も尊い財宝であり、最もすばら

しい奇跡である。

自分の義務を果たすということは、第二のすばらしいことである。(略)

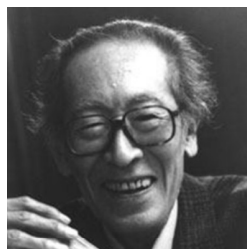
私の第三の信条は、残虐、憎悪、暴力、あるいは不正をもつてしては、精神的にも、道徳的にも、物質的な意味でも、永遠の榮土を築くことはできないということです。(略)

原爆投下後一五年を経て、日本のキリスト者に対して書かれたこの手紙には、長い年月の中での記憶の混乱と見られるところなども見られるが、イーザリーが原爆の投下について、どのような反省的思考を繰り広げてきたか、また少なくともその点において、「精神障壁者」として隔離病棟に強制収容されるような人格の持ち主でなかったことは、明らかであろうと思われるのである。文庫版訳者の篠原道瑛は「訳者あとがき」において以下のように記している。

こうして、「ヒロシマわが罪と罰」の道徳的責任を問いつづけ、死にいたるまで止めようとはしなかったアメリカ空軍少佐クロード・ロバート・イーザリーは一九七八年七月一日、喉頭癌のため五九歳の生涯を閉じた。

III 「ヒロシマわが罪と罰」と堀田善衛「審判」

ヒロシマへの原爆投下に関わった米軍パイロットを重要な登場人物の一人とする堀田善衛の長編「審判」は、『世界』一九六〇年一月号から一九六三年三月号まで連載され、同年一〇月、単行本として岩波書店から刊行された。堀田のこの作品を正面から取り扱った作品論としては、従来鈴木昭一の「堀田善衛論——「審



堀田善衛

判」を中心として」⁵⁾が代表的なものとして知られ、その他平野謙「現代における個人の責任」⁶⁾、小中陽太郎『日本の原爆文学六堀田善衛』「解説——終末論的なヒカレスク小説」⁷⁾などの蓄積がある。また近年には水溜真由美による、新たな調査を踏まえた画期的な論文「堀田善衛『審判』論…原爆投下の罪と裁き」⁸⁾が発表されている。

平野、小中が、イーザリーとアンデルスとの往復書簡の存在を堀田が知っていたかどうかについて、それぞれが推測を展開しているのに対して、水溜は

こうした背景の下で、一九六〇年代初めから半ばにかけてイーザリーをモデルにした文学作品が相次いで発表された。

その一つが堀田善衛の長編小説『審判』である。(略)また一九六四年には、宮本研の戯曲『ザ・パイロット』⁹⁾といういいだももの長編小説『アメリカの英雄』が『新日本文学』誌上に掲載された。

と、当時の文学場における事情を明らかにし、堀田自身も、イーザリーをモデルとする人物を登場させる別の作品「零から数えて」¹⁰⁾を書いていることを明らかにしている。

堀田の「審判」は、大略以下のような内容の長編小説である。

恭助は一九三九年から四一年までと、四二年から敗戦の時まで、二度召集されて中国大陸で過ごした。大陸では自分の手で中国人の男や女を殺した。戦闘で殺したのとは別に六人

は殺した。敗戦で復員する直前になって、こんな自分が何事もなかったように、このまま内地の日常生活にもどることができないという思いが強まり、集中營を脱走した。中国をさまよって浮浪者になる直前に憲兵に逮捕された。

帰国後の恭助は神経症に苦しみ、銀行もやめ、妻とも離婚した。自分の存在感がたしかでなく、外部世界も朦朧として、感情が麻痺し、記憶もうすれ、まったく無口になった。離人症といわれる症状であった。ところがある日「突如としてこの灰色の輪廓のぼやけた世界の奥の方から、ある一つの、きめつけたように輪廓も遠近の距離感も明確な光景が襲いかかって来た」。そして、恭助の脚が突然「く」の字に拘攣した。「両脚を「く」の字型に曲げて動かなくなつたのである。

整形外科に半年ほど入院したが変化は見られなかった。神経科にうつって一年、心理療法によって、はじめて症状は好転した。戦争は無数の犯罪を生み、多くの人々の魂を破壊する。しかし、人々は戦争の記憶を隠蔽し、何事もなかったかのように、日常生活の些事に埋もれていく。恭助に老婆の処分を命じた経師屋出身の軍曹は、面白半分に老婆を襲って、強姦をし、水道のホースを局部につっこんで下腹部の膨れ上るのを見て楽しんでいたのである。

恭助が住所を探し求めて訪ねると、この経師屋は子供が四人いて、一生懸命に仕事をしていた。そして「おれは経師屋だ」と繰り返すばかりだった。河北画伯の仕事もしていて見事な職人だった。この経師屋にあのような無残なこ

とをさせたのは何か。戦後十四年たつて、戦争の無数の犯罪は暗闇に隠蔽されて、日本は戦後復興を成しとげた。米ソ対立は激化し、いつ核戦争がはじまってもおかしくない状態だった。戦争の記憶を暗闇に沈め、対米従属を強めて得られる繁栄は二七の繁栄ではないか。日本人の道徳は麻痺し、家庭は崩壊して、人々はバラバラになり、精神分裂的狂騒を激化させていた。

この日本に広島に原爆を投下したアメリカ人飛行士がやってくる。安保反対のデモは国会に押し寄せて警官隊と衝突し、多数の負傷者を出した。恭助は天皇に面会しようとして宮内庁に押しかけた。

「わたくしは、出来れば、この世の中を、たすけたいと思います。世界が、ぜんぶ、北極になつては、いけないでしょう。けれども、なんででしょうか、いいえ、どうでしょうか。人間はいなくてはならないのでしょうか。どうでしょうか。いなかつたら、雪と氷の、あの、北極で。……いいえ、間違ひ、ました。わたくしは、けつきよく、なんでも、どうでもよろしい、と思ひましたが。恭助サン、あなたは、わるい、人です。なんでも、どうでもよろしいという思想をもつて、人は、働いて行くことが、出来ませんのです。それを回復したいと、思つて、わたくしは、日本へ、来ました。ところが……」

中国の老婆を殺害した恭助の告白を聞いたポール・リポールのたどたどしい日本語である。ポールは四十一歳、広島に原爆を投下したB-29の乗組員だった。

「この夜飛ぶ人々の、主が守りによりて安らかに、また帰路を全からしめられんことを。」と従軍牧師のイエス・キリストの名による祝福を受けてテニアンを飛びたち、無事任務をはたして帰投したのだつた。当時の彼は他の隊員たちと同様に自分の行為を疑わなかつたが、二年半ほどしてから、重い疑いが襲いかかつて来た。

広島は一瞬で破壊され、すべての人間の生命、生活と文化と歴史がうばわれて、北極の荒涼たる無人の氷原と同様な廃墟と化した。しかし、神と文明の名においてなされたこの破壊と殺戮は、神も、文明も裁くことができなかつた。彼は裁きがないことに苦しみ、虚無の心を抱いてさまよう「例外の人」となつた。文明、神と人間に対して、根本的な疑惑を抱き、世間と交わりが出来ずに、絶対的な孤独に苦しむことになつた。妻と離婚し、精神病院で暮し、極北のグリーンランドへ通う輸送機運航の仕事に従事して、出教授と出会い、日本に渡航する決意をした。

彼は恭助とちがつて自分が殺したものの顔も姿も、何も知らなかつた。具体的な殺人の自覚、罪の感覚はなかつた。アメリカでの最終判決は、判決がないということだつた。しかし、あの巨大な破壊と殺戮が罪でなく罰がなないとしたら、この世は何をしてもいい、虚無の世界になつてしまふ。彼は審判を求めて日本に向かう。日本に行き、広島を踏めば、具体的に罪を自覚し、裁きを受けて、新しい生活を回復することができるのではないか。しかし、日本も虚無と混乱の頽廢が支配していた。彼は写真で見た出教

授の長女雪見子を日本のシンボルとして懂れていたが、新劇の女優で、花山外相との関係が公然と知られている彼女の生活は荒廃し、頹廢していた。

河北画伯の原爆の絵を見たポールは狂乱し、一人で広島に行き、橋姫の能面をかぶって「ワタ……クシハー……オニー……デス……」と叫びながら彷徨し、平和大橋から落ちて死んだ。一九五九年十一月、米ソ対立で核戦争の危機が切迫し、安保改定阻止の統一行動がはげしくたたかわれていた時代のことである⁽¹⁰⁾。

クロード・イーザリーをモデルとしそれと対比的に、中国大陆で一人の中国人老女を殺したことで戦後精神障害を起こし、廃人同様となった日本人元兵士を配し、現代の人間が置かれている条件の恐ろしさを、さまざまな角度から探求するという、堀田一流の戦争に対するスタンスが、ここには明らかに見られる⁽¹¹⁾。

水溜は、先に挙げた論文の中で、パイロットのポールと中国人を殺害した恭介の間にある、戦争による殺害行為における「非対称性」を、鋭く指摘している。突き詰めていえば、殺した相手が見えなかったポールと、目前で、我が手で殺した恭介との非対称である。それは戦場に出た人間の間の「記憶」に刻みこまれたトラウマの差異にもつながる⁽¹²⁾。

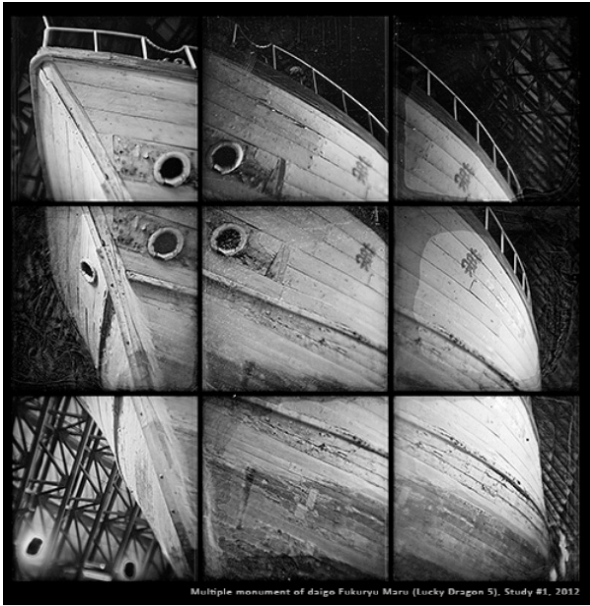
水溜は論文の終わり近くに『審判』に登場するポールと恭介は戦争中に殺人を犯したことを深く反省する良心的な人物である。こうした人物設定について、ポールや恭介のような良心的な人物は実際の帰還兵の中では稀でありリアルではないという批判があり得るかもしれない」と厳しい指摘をおこなっている。たし

かにそれが現実と呼ぶべきものであるともいえるかもしれない。

しかし「戦場」で「敵」であったから、ということでも自らの行為を合理化する言説が後を絶たないのであるとすれば、どこにその「非対称」を克服する切り口を見出すことができるのか。新井卓の「49 pumpkins」は、萌芽的であるとはいえ、まさにその「非対称」を、何らかの形で実感的に希薄化していく試みに一つであったとは、いえないであろうか。「現実」のリアリティそのものが、歴史的言説のなかで「リアル」さを強調されていくような方向に進もうとするならば、「想像力」のもたらす「表現」や「表象」が、そうした「リアル」な「記憶」との懸隔を凌駕するような、別種のリアリティをもって、受容者の心を揺さぶるという可能性を見出すことはできないであろうか⁽¹³⁾。

福島を写し、第五福竜丸を写し、そして「49 pumpkins」を制作してきた新井は、二〇一五年九月に刊行された写真集『MONUMENTS』の「あとがき」に、次のように記している

モノユメントはほんらい、一つの意味や解釈を表わすものではない。その表面に触れる一人ひとりに対して、新たな感情や想起を触発すること。その体験はいつでも新しく、個人的であり決してひとつの意味に回収されはしない。だから、原爆を、第五福竜丸を shouldn't わたしたちは今しばらく、表面に留まりつづけなくてはならない——そこにあるのはかつてあった時空の境界面である——モノユメントの表面から紡ぎ出される、わたしとあなたの新しい物語に、何度でも耳を傾けること。21世紀の新たな消滅と忘却への闘いは、ふたたび、そのようにしてなされるだろう⁽¹⁴⁾。



Takashi Arai : "Lucky Dragon 5"

「記憶」を更新しつつ、時空の境界面に出現する「現実」と対峙できるほどの「想像力」を備えた若い表現者たち。新井の仕事はその先端に立つ努力の成果を示すものである。彼／彼女らの力に、ますます注目していきたいと思うのである⁽¹⁵⁾。



Takashi Arai: From "Mirrors in Our Nights"

注

- 1 新井卓(あらい たかし、一九七八年―)は日本の写真家。写真黎明期の技法・ダゲレオタイプ(銀板写真を独自に習得し制作活動を展開、内外の美術館・ギャラリー等で作品を発表しつづけている。筆者による新井への直接のインタビューの要約。文責筆者
- 2 2015年 「In the Wake: Japanese Photographers Respond to 3/11」ボストン美術館
- 3 2014年 「EXPOSED IN A HUNDRED SUNS / 百の太陽に灼かれて」Photo Gallery International¹ 東京
- 2014年 「これからの写真」愛知県美術館、名古屋
- 2013年 「六本木クローキング2013: アウト・オブ・ダウト」森美術館
- 2013年 「D-type Story」泰吉 (Timeless Gallery)² 北京
- 2013年 「百の太陽に灼かれて」EXPOSED IN A HUNDRED SUNS³ 尼崎市総合文化センター
- 2012年 「福島からひろがる視線 2 MIRRORS HALF ASLEEP 新井卓銀板写真展」原爆の図丸木美術館
- 2012年 「写真の現在 4 そのときの光、そのさきの風」東京国立近代美術館
- 2012年 「Here and There ― 明日の島、ニコンサロン(銀座/大阪巡回)」
- 2011年 「Dream of Images」泰吉 (Timeless Gallery)⁴ 北京
- 2011年 「夜々の鏡 / Mirrors in Our Nights」川崎市市民ミュージアム
- 2011年 「光、礫、水」―ダゲレオタイプ、拾得物、映像による

る(滝) 明治大学生田図書館 Gallery ZERO

- 2010年 「Immemorial Foreseeing ― 遠い昔の予感」Fellini Gallery⁵ 上海
- 2009年 「Heritages de Daguerre」Association Louis Daguerre⁶ ブリ市庁舎、フランス
- 2009年 「Flawless Lakes」Project Basho⁷、フィラデルフィア
- 2006年 「鏡」このランデヴー / Rendezvous on Mirror⁸ 横浜美術館、横浜
- 4 『原爆投下、正しかったが…』エノラ・ゲイ最後の乗組員死去晩年に語った複雑な思い 『ガーディアン』紙より
<http://newsphere.jp/world-report/20140801-7/>
- 5 『日本文学』一九六七年二月号
- 6 『堀田善衛全集』第六卷「審判」解説 筑摩書房 一九七五年二月
- 7 ほるぶ出版、一九八三年九月
- 8 『北海道大学文学研究科紀要』一四三… 二〇一四年七月二五日
- 9 『文学界』一九五九年一月号から一九六〇年二月号にかけて連載され、同年六月に文芸春秋新社より単行本刊行。
- 10 伊豆利彦 『平和新聞』連載第五五回「堀田善衛「審判」その一二〇〇五年七月、第五六回その二、同九月を、一部改変して借用。
- 11 そのこととともに、この小説には当時の日本の中流社会のもの考え方といったものも色濃く反映されていることも、諸家の指摘する通りであろう。
- 12 水溜は、この後論文中でドストエフスキーやキリスト教と関連付ける角度からこの小説についての論を展開しているが、それについてはここでは触れる余裕がない。しかしそれらの多くは、ユニーク

で説得力ある視角を提供しているといえよう。

13 例えばこうした出来事も、「非対称性」を克服するという「*pumpkins*」の試みと結びつけて考えることができるのではないだろうか。「トルーマン大統領の孫と被爆者が対面！原爆の『真実』」
ザテレビジョン 二〇一五年八月八日 一時〇〇分 配信

<http://news.walkerplus.com/article/62983/>

14 新井卓 (Takashi Arai) 『MONUMENTS』フォト・ギャラリー・インターナショナル二〇一五年九月

15 新井は二〇一六年に第四一回「木村伊兵衛写真真賞」(朝日新聞・朝日新聞出版)を受賞、その記念展が同年四月二二日〜五月二日の会期でコニカミノルタプラザで開催された。